

ずいそう

水行十日 陸行一月

渡辺雅夫



「邪馬台国はどこにあった？」

新井白石が畿内大和説を唱えれば本居宣長が九州説を唱えるなど、この論争は江戸時代から繰り広げられてきた。明治に入り京都帝大の内藤湖南が畿内説を発表すると、東京帝大の白鳥庫吉が九州説を発表し、お互い譲らず論争は激化した。昭和に入ると皇国史観の影響でこの話題は下火になるが、昭和42年に長崎県在住の盲目の作家、宮崎康平氏の書いた「まぼろしの邪馬台国」がベストセラーとなり、世に言う邪馬台国ブームの始まりとなった。以降、プロの歴史学者や考古学者はもちろん、専門外の学者や作家が続々と持論を発表し、書店を賑わすようになった。

何故このようにアマチュア研究者が多く出現したのか。通称「魏志倭人伝」、正確には「三国志魏書東夷伝倭人ノ条」に記されている僅か2,006文字だけが邪馬台国に関する文献資料だからである。極端な話、原文と読み下し文さえ持っていれば、プロもアマも基本的条件は同じとなる。2,006文字の新解釈を発表しても、即座に否定や肯定を裏付ける物的証拠がほとんど見あたらないため、アマチュア研究者の自由奔放な参加が可能となったのである。

邪馬台国がどこにあったかはさておき、西暦240年頃、中国からの使者が朝鮮半島の釜山付近から海を渡り、対馬、壱岐を経て九州東松浦半島先端の呼子か唐津に上陸し、前原から博多に入ったまでは、九州説、畿内説の論者も大方は認めているところである。ちなみに魏志倭人伝では対馬は対海国、壱岐は一大国、東松浦半島は末盧国、前原（筑前国怡土郡）は伊都国、そして博多（筑前国那珂郡）は奴国であり、2万余戸の人が住んでいたという。町の大きさや音の響きからしても頷けるものがある。

さてこれからが大変である。「南、投馬国に至る水行二十日、五万余戸。南、邪馬台国に至る、女王の都する所、水行十日陸行一月、七万余戸」これが議論の沸騰するところとなっている。

この文章をそのまま読めば、邪馬台国は九州を遙かに南下して南方海上に行ってしまう。もちろんジャワ・

スマトラ説を提案された東洋史学の先生もいらっちゃったが、畿内説では南を東の誤りとし、九州北岸から海路、陸路で東に進み、現在の奈良付近を邪馬台国に比定し、大和朝廷の前身とした。この時の投馬国は日本海経由ならば出雲か但馬、瀬戸内海経由ならば鯛で有名な鞆とのおまなどが挙げられている。いずれも投馬と呼べないこともない。

一方九州説では陸行一月を一日の誤りとした。距離や日程の解釈にもいろいろと工夫を凝らし、九州北岸から海岸づたいに東または西まわりに南下したり、川を南下して九州の各地に邪馬台国を比定した。筑後国山門郡や肥後国山門郷など名前の似ているところもあるし、似ていないところもある。いずれも古い時代の古墳や遺跡が多く出土しているところである。

私が邪馬台国にはまったのは昭和50年代前半、新聞も拡げられない満員電車で毎朝1時間以上も乗らなければならぬ時に手にした文庫版の「まぼろしの邪馬台国」からである。高度成長期で休日でもままたまらない時期での通勤の往復2時間は、まさに私一人だけの秘密のタイムトラベルの時間でもあった。以来30年、邪馬台国から始まったこのタイムトラベルは、古代のロマンを求め、記紀の世界や日本国家の起源へと自由にその範囲を拡げていった。

サラリーマン生活34年、神経もかなりすり減らしてきているはずなのであるが、まだまだ心身共に大丈夫のようである。別に意識もしていなかったが、きっと時間も場所も制約されないこのタイムトラベルが、恰好のストレス解消であったのではなかろうか。

卑弥呼の墓は径百余歩、そのような古墳の中から魏の皇帝から賜った「親魏倭王」と刻まれた金印が見つかった時、この論争には終止符が打たれるであろう。見つかるとしたら久留米市近郊と密かに思っているのだが、早く見つかって欲しい気持ちが半分、永遠に見つかって欲しくない気持ちが半分……。